NEWS LETTER
SEIGAKUIN NEWSLETTER

& Seig

No.
278
Dec.2020

特集 SDGsの見つけ方

&Seig NEWS LETTER
SEIGAKUIN NEWSLETTER
No. 278
Dec.2020

CONTENTS

01 &Talk［SDGsの見つけ方］

05 focus-SDGsの見つけ方
［聖学院小学校］

06 focus-SDGsの見つけ方
［女子聖学院中学校・高等学校］

07 focus-SDGsの見つけ方
［聖学院中学校・高等学校］

08 focus-SDGsの見つけ方
［聖学院大学］

09 在校生の活躍

10 聖学院SDGsコンテスト PHOTO & MOVIE
「ワタシが見つけたエコロジー」
受賞作品発表

11 Seig NEWS

14 Our Mission

15 聖学院歴史探訪

聖学院ニュースレターアンケート

QRコードからあなたの声をきかせてください。
アンケートに回答いただいた方の中から抽選で10名様に「聖学院オリジナルキーホルダー」をプレゼント！

●有効回答期間
2020年12月28日～2021年2月28日

●当選発表
当選者の発表は、賞品の発送をもって代えさせていただきます。

本アンケートに関するお問い合わせ
聖学院広報センター Tel 03-3917-8530

編　　集／学校法人聖学院　広報センター
デザイン／株式会社キュー・ジー
発 行 日／2020年12月18日

SDGsすなわち社会課題解決をめざすには「自分にも関係がある」と主体的に考えること、自分ゴト化が必要です。「聖学院SDGsコンテスト PHOTO & MOVIE」を開催したのも、学校という枠からもう少し範囲を広げ、一人ひとりが身近な社会課題に目を向けてほしいという思いがあったからです。見つけることや気づきをインプットとするならSDGsを他の人にも認知してもらうアウトプットまで行動をつなげたい。

このテーマについてお集まりいただいたのはコンテストの審査員でフォトグラファーの石原康男さん、武本花奈さんと、聖学院小学校の田村一秋教頭先生です。石原さんは聖学院を幼稚園から大学院まで長年撮影されていて、聖学院を熟知されているフォトグラファーです。武本さんは聖学院大学の卒業生で、ALS患者※2の取材活動を続け、出版という形でアウトプットをされています。小学校では今年か

SDGsの見つけ方

“好き”から始めるSDGs

&Ta

武本 花奈

写真家。聖学院大学政治経済学部卒業。広告、書籍の撮影などを手がける傍ら、2014年より難病ALS患者の撮影を開始。著書に「これからも生きていく―難病ALS患者からのメッセージ」（春陽堂書店、2020）。季刊誌『福祉労働』にて、フォトエッセイ「インクルーシブに生きるふつうの人」連載中。

ら、社会や世界に関わり合うための主体的・対話的で深い学びを重視する新しい学習観を持った学習指導要領での学びが始まっています。それぞれの立場から、行動するためには何が必要か、教育が貢献できることは何かについてお話をうかがいました。

コンテストの審査風景。第1回となる今回は62点の作品応募がありました。

モチーフを限定しない、多種多様な作品が集まったフォトコンテスト

――コンテストの審査を通じて感じたことや思ったことを教えてください。

石原　今回のコンテストは本格的に写真を撮っている方以外の応募も多く、技術的なことよりテーマが重視されています。また皆さん、メディアなどでたくさん良い写真を見られているので、映像が洗練されていますね。

武本　私は他でも審査員をしていますが、今回のコンテストは被写体のジャンルが様々なので見ていて非常に楽しかったです。撮影者の興味の対象に私も興味を持って見ることができました。言いたいことが伝わってきて「なるほど」とうなずく作品もありました。

石原　そうですね。皆さん聖学院が掲げたテーマに沿ってそれぞれの

lk

カメラを通して身近なところからSDGsを考えてもらおうと、今年から始まった「聖学院SDGsコンテスト PHOTO & MOVIE」※1。その審査員2名と、聖学院小学校の教頭先生にお集まりいただき、コンテストを通じて感じたことや、SDGsの認知拡大、社会に主体的に関わるために教育ができることなどをお話しいただきました。

田村 一秋

玉川大学教育学部卒業後、1985年より聖学院小学校に勤務。入学時の1年生から卒業学年の6年生まで全学年の担任教師を歴任。聖学院小学校にとって初めての建て替えである旧校舎から仮校舎、そして現在の新校舎と3つの校舎を経験。2000年から2年間、聖学院アトランタ国際学校（SAINTS）での勤務を経て、2017年より教頭を勤める。

石原 康男

1955年、東京都豊島区生まれ。東京工芸大学（旧東京写真大学）卒業。埼玉県川越市在住のフォトグラファー。学校法人聖学院での撮影をはじめ、地元川越の自然風景、祭事や地元の高等学校を中心に活躍中。2008年度、学校法人聖学院生涯学習センター「写真講座」講師。

モチーフで作品を作ってくれたと思います。

田村　私も写真が好きなので、ぜひ撮りためていた写真をたくさん出そうと思っていたのですが、気づくと既に終わっていて愕然としました（笑）

武本　来年はぜひ応募してください（笑）。

　私は、もっともっと学生たちの写真が、特に小さい子たちの写真が見てみたいです。小学校の子どもたちが何を考えているのかすごく興味があるので、先生から子どもたちに「出してみよう」と促していただくのも良いかなと思います。

石原　聖学院小学校では、iPadで写真を撮って作品を発表する授業をしているので、そういう授業と連動して応募してもらっても良いかも知れません。子どもたちは、すごく面白い視点を持っていますから。

田村　そうですね。子どもの写真は大人からすると撮った理由がわからないものもあります。きれいな風景かどうかより自分の思い入れがある場所だったり、なぜこうなっているか不思議に思ったりしながら撮影します。そうした観点が面白い作品につながりますよね。

「まだ社会経験の少ない子どもたちにとって、世の中とつながっている感覚をもつことは難しい。でも主体的、対話的な学びが、子どもたちの将来の社会課題への関わり方の下地になると思っています。」と語る田村先生

主体性をもって関わり、対話的に学ぶ聖学院小学校

――小学校でSDGsを意識した学びなどはありますか？

田村　まだ社会経験の少ない子どもたちにとって、世の中とつながっている感覚をもつことは難しいので、小学校ではSDGsという言葉を使って授業をすることはほとんどありません。しかし、今回の学習指導要領の改定に盛り込まれたような主体性を持ってものごとに関わっていくための学びや対話的な学びは以前から重視しています。それが子どもたちの社会課題への関わり方の下地になると思っています。その取り組みとして主に、先生が知識を伝達する受動的な授業だけではなく、アクティブラーニングのように能動的で動きのある授業を行っています。

　例えば石原さんが先ほどおっしゃったように「学校の大好きな場所」や「季節を感じる風景」といったテーマで写真を撮って、友だちの意見を聞きながら選んで、その選んだ理由付きで発表するという授業をしたことがあります。この授業のポイントは自分だけではなく、友だちに発表する行為で完結するところです。誰かに対して自分の思いをしっかり伝えられる、知識を得たり技術を向上させるのとは別の学びです。

石原　聖学院小学校では「ほら、できたよ」※3という児童作品展に参加してますよね。

田村　残念ながら今年は出展できなくなりましたが、毎年参加して図工作品を展示しています。東京地区にある私立の小学校が行っている図工の展示会で、聖学院小学校は1～6年生まで全員が作品を作ります。テーマを設けて聖学院の全生徒の作品で完結した一つの作品になるようにしています。全体として眺めても「なるほど」と楽しめますし、児童が家族に「これは僕のだ」と自分の作品を単体でも見せられるように展示しています。

石原　みんなで成し遂げるというのが持続可能な社会に必要な「パートナーシップ」の体験ですよね。

言語化することで自分自身の中での形ができていく

――武本さんは聖学院大学のご出身ですが、どんな大学生活でしたか？

武本　在学中、土方先生のゼミに入ってました。本当に24時間勉強のことを考えていたなと思います。膨大な宿題が出るゼミなので、その宿題をこなすためにたくさん本を読んで、その宿題を授業で発表し合います。授業の時間内では足りないから、その後もみんなで集まり続きをやっていました。とにかくアウトプットの連続でした。時には先輩たちと口論になったり。でもそれがすごく楽しくて、好きなことを言っても良いんだ！っていう雰囲気がありました。大学時代に素直に思いを外に出せるという経験ができたのはとても良かったです。社会人になってからも自分の中の軸になっていると強く感じています。

　また、私は在学時からカメラマンになることを決めていたので、ゼミで現象学という表現をすることを研究テーマにしていました。ある時、土方先生に「自分が撮った写真が何であるのか、ちゃんと言葉で説明しなさい。言葉で説明できないならそれは暴力と一緒だ」と言われたのをよく覚えてます。それを聞いて「ああ、そうだな。ちゃんと人に伝えられてこその写真だな」って、その時初めて明確に意識しました。それからの自分を考えると言葉にするというのは大事なことだなと思いますし、それを小学校の時から教えてもらえる聖学院の子どもたちはすごく羨ましいです。

「大学時代に素直に思いを伝えられる経験ができたのは、社会人になってからも自分の中の軸になっていると思います」と語る武本さん

田村　武本さんのゼミの土方先生がおっしゃったことはとてもよくわかります。やっぱり言語化するということは、すごく大事なことだと思うんです。アクティブラーニングって教員も児童も充実度が高いのでそれだけでやった気になってしまうのですが、「わー！楽しかったねー！」で終わるとただのお遊びになってしまうんですね。教師が最後の振り返りの時に言語化してあげることで「あ、今日はこういう勉強をしたんだ」と子どもたちの中に落とし込みができる。学びとして定着していきます。だから言語化するというのは自分でちゃんと理解するために大事なことだと思います。

この鼎談を動画でも見ることができます。

誌面に収まりきらなかった話などもありますのでこちらも是非ご覧ください。

アウトプットは目的ではなく、興味をもってより深く関わっていく過程の一つ

――SDGsや社会課題に触れ、インプットにとどまらずアウトプットまでつなげるには何が必要だと思いますか？

武本　まず前提として興味を持つことが間違いなくあると思います。一目惚れ的に出会うと思われがちですが、本当に好きになるとか興味を持つというのは、その瞬間だけで成立するのではなく、もうちょっと踏み込んで関わって育っていくものだと思います。

私はALSという難病の患者さんの取材活動を続けています。ALSに興味をもった最初のきっかけは、あるALS患者さんの手記を本屋で見かけたことで、奇しくもその後すぐに別のALS患者さんの手記で撮影するお仕事をいただきました。その後、他の患者さんを紹介してもらったり自分から会いに行ったりなど現在まで38人の患者さんを取材しています。次々に会っていく経験をした時に「あ、これは何かしなければいけないな」と感じました。

つまりアウトプットというのはゴールではなく、インプットとアウトプットを繰り返して好きになる、興味をもつ過程の一つだと思います。SDGsに関していうと、「アウトプットしなくちゃ」と思うことより、それを上手く取り込んでいったらいつの間にかアウトプットできていた、となるのが良いかなと思います。

石原　武本さんが撮影されたALS患者さんの写真をみると衝撃を受けます。まず、そのインパクトは言葉だけでは伝わらないし知らなかった世界を知るきっかけになります。興味を持ったことに深く深く関わって形にするというのは大切だなと改めて思いました。

武本　写真に関していうならば、人は絶対に好きじゃないものは写真に撮らない、興味のあるものしかシャッターを切らないと思っています。その点で写真は好きなもの、興味があるものがとてもわかりやすいツールかもしれないですね。

田村　小学生は特にそうですね。被写体にこだわりがあったり、我々が気がつかないようなものが見えています。

武本　だから小学生の写真を見たいなと思いますよね。何に興味があるかストレートで。

田村　そうですね。先ほど話したiPadで写真を撮る授業でも、「ここはどこ？！」「なんでここを選んだの？！」って聞いたら、必ず面白い答えが返ってきます。それが聞きたいですよね。だから私は写真にプラスして写した子の思いが知りたいのです。それは周りが納得するものかどうかはわかりません。でも「この子はこう思ったんだ」というところが大切で、そういうアウトプットにはつなげたいと思います。

石原　一億総カメラマン時代ということを考えるとSNSもアウトプットの一つだと思います。「いいね！」も人に影響を与えたという評価の証です。しかしそこで終わりにしてしまうと、ただの評価というだけで通り過ぎていきます。「いいね！」をもらって終わりではなく、このコンテストのように写真を応募して評価をもらい、それを大勢の人と共有するのが大事なのではないでしょうか。それはSDGsでいえば提起になりますし、自他ともにテーマについて考えるきっかけになります。そういうことを経験したり理解できるのが、聖学院小学校の教育にも通じるところで、教育の力だと思います。

「「いいね！」をもらって終わりではなく、コンテストに応募して評価をもらい、それを大勢の人と共有するのが大事なのではないでしょうか」と語る石原さん

武本　普通に生活している中でも人は無意識にアウトプットをたくさんしています。例えば本を読んで「こういうことが書いてあったよ」と誰かに言ったり、自分がしてもらったことに対して感想を述べたりするのも、実はアウトプットです。何かを伝えて返してもらう、それを重ねて周囲と関わり合うことで、どんどんそのアウトプットが大きくなっていきます。このコンテストはまさにそういう要素が大きかったと思います。自分が大事にしているものにファインダーを向け、写真と言葉で送り、それを受け取った審査員がコメントをして応募者に返す。応募者の中には「審査員からコメントをもらえて励みになった」という人がいたと聞きました。ここでまた新しい関わり合いが生まれアウトプットが大きくなっていますよね。私たち審査員が気づかせてもらうこともたくさんありましたし、とても楽しいコンテストでした。

（取材日／2020年11月）

※1　「聖学院SDGsコンテスト PHOTO & MOVIE」詳細はp10をご参照ください。

※2　筋萎縮性側索硬化症（ALS）とは、手足・のど・舌の筋肉や呼吸に必要な筋肉がだんだんやせて力がなくなっていく病気です。しかし、筋肉そのものの病気ではなく、筋肉を動かし、かつ運動をつかさどる神経（運動ニューロン）だけが障害をうけます。その結果、脳から「手足を動かせ」という命令が伝わらなくなることにより、力が弱くなり、筋肉がやせていきます。その一方で、体の感覚、視力や聴力、内臓機能などはすべて保たれることが普通です。
（出典：難病情報センター　病気の解説（一般利用者向け）　https://www.nanbyou.or.jp/entry/52）

※3　東京私立初等学校協会主催の東京私立小学校児童作品展。毎年、銀座松屋のイベントホールで開催される図工作品を展示するイベント。

東京私立小学校児童作品展「ほら、できたよ」の聖学院小学校作品。1～6年生全員が作品を作っています。写真は2019年に出展した時のもの。

iPadで写真を撮って、友だちの意見を聞きながら選んで、その選んだ理由付きで発表する授業。自分の思いをしっかり伝える学び。

focus*（SDGsの見つけ方）

各校のSDGsや自分ゴト化へのアプローチをご紹介します

「作家」として自分が書いた作文を朗読する児童。

（上）「作家」の朗読を聞いて、ファンとして付箋一枚分のファンレターを書く児童。必ず褒めるのがルールです。（下）1～6年生まで各学年一人ずつでグループになりお昼を食べるスクールランチ。同学年以外の価値観に触れることや食べ物への感謝もSDGsへの一歩です。

聖学院小学校

作家の時間

協同学習Cooperative Learning

多くの場合は4人一組になり、学習テーマに沿って一人ひとりに役割が割り振られます。それぞれが責任を負うことで生じる信頼関係の中で、個々の役割を果たすことを通して学びを深めあいます。この協同学習によって一人ではできない深い学びを経験します。

※聖学院小学校の写真は全て2019年度に撮影されたものです。

楽しみながら自分ゴト化の種を育てる

小学生はまだ社会を身近なものとして捉えるのが難しいので聖学院小学校ではSDGsそのものを扱う機会は多くはありません。しかし将来、社会課題に対して自分ゴトとして向き合えるよう、主体性と協働性を重視したアクティブラーニングを授業に取り入れています。

「作家の時間」という各学年週1回行われる表現の授業があります。元々アメリカで始まったワークショップで、作家のロールプレイングを通じて文を書くというものです。作文というと、その児童の興味や主体性とは関係なく、決められたテーマを決められた文字数で書くイメージがあると思います。しかしこの表現の授業では、その児童が作家なのでテーマを自分で決めることができます。好きな物語や昨日見た夢、家族のことなど何でもOKです。文字数も制限がありません。作品ができるとみんなの前で朗読し、ファンという設定のクラスメイトにファンレターとして一言コメントを書いた付箋をもらいます。ファンレターなのでネガティブなことやアドバイスは書かないルールです。必ず褒めます。作家以外の児童にも役割があるのもこの表現の授業のポイントです。

教頭の田村先生は「作家の時間」について「作家は順番に回ってきます。褒める児童は、経験上漠然と褒められるのは嬉しくないと知っているので、良いところを一生懸命探します。それが習慣化し授業以外でも人や物事の肯定的な面に目を向けるようになります。作家役の児童は、褒められるに従い読み手を意識した文章に変わっていき、進んで創意工夫を凝らすようになります」と語ります。作家役の時は主体的に取り組み、ファン役の時は、相手の気持ちに立ってものごとを見る。その両方を繰り返すことで、児童の中に自分ゴト化の種が育っていくのではないでしょうか。

女子聖学院
中学校・高等学校

教科の中のSDGs

中学・夏の進路課題
「私が気になる社会の姿」

中学生は進路指導部の課題として夏休みに、環境、人権、医療福祉など様々な社会課題について各自調査をし、その内容を1枚の紙にまとめました。生徒の作品はクローンホール前に展示されました。

世界を変えていくためには“ことば”が必要

女子聖学院中学校・高等学校では教科の中でSDGsをテーマとした学びを行なっています。中学校では特に力を入れていて、社会科では基本的な知識としてSDGsを学び、国語の「聞く話す」の授業では、環境活動家グレタ・トゥーンベリさんの国連でのスピーチ映像を視聴し、自らも環境問題をテーマとする原稿を作成してスピーチを行いました。

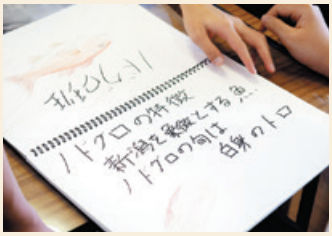
そして、英語科ではSDGsをきっかけに世界に目を向けようというコンセプトで授業が行われました。今年度の中2生は、まずSDGsと環境問題への理解を深めるために、小笠原諸島について調べて、それを英語の新聞として作成しました。8月以降は『もし世界が100人の村だったら』を題材として、文字の読み書きができない“非識字”や、所得格差などの問題を通して、世界の現状を理解する授業を行いました。ネイティブ教員による英語での読み聞かせの授業の後、グループでディスカッションする授業では非識字によって生じる様々な問題が生徒たちによって議論され、授業の最後には、識字率を上げることに賛成か反対かの自分の意見をワークシートにまとめました。女子聖学院が英語の授業で重視しているのは“自分の意見を持つことの大切さ”です。英文を和訳するとき、直訳するだけでは気持ちは伝わりません。英文に自分の想いを込めて、相手に伝えるための日本語にしてほしい、生きている言葉を使う楽しさを学んでほしい、と大井藤花先生は言います。

女子聖学院は表現をすること、“ことば”を大切にしています。日本語でも英語でも、自分の想いを自分のことばで表せる人になってほしいと考え、「Be a Messenger〜語ることばをもつ人を育てます〜」をスローガンとしています。

（上）小笠原諸島について調べ、英字で新聞を作成。
（下）所得格差を体験するワークショップ。

非識字によって生じる問題について考え、意見を出しました。

手作業での田植えの体験。食卓に並ぶ食材がどのように作られているのか、体験して学ぶことに意味があります。



今年は5月の農村体験学習が実施できませんでした。糸魚川に行きたかった思いを中3生たちがスケッチブックリレーの動画にして表現しました。動画は11/2、3のオンライン記念祭にて配信されました。

聖学院
中学校・高等学校

糸魚川農村体験学習

糸魚川ガイドブック

糸魚川農村体験に参加した2019年の中3生は、糸魚川の魅力を伝えるガイドブックをクラウドファンディングで資金を集めて自主的に制作しました。日本語版と英語版があります。

聖学院ならではの学びを農村で

聖学院中学校の3泊4日を旅する体験学習はたいへんユニークです。神社、仏閣など歴史的な観光スポットの見学を修学旅行の目的とする学校が一般的だと思いますが、聖学院では田植えなどの農作業を手伝い、農村での生活を体験します。糸魚川農村体験は35年間行われていますが、この体験学習を導入した考えの一つに、普段食べているお米の作り方を知って欲しいという思いがあったと言います。1番の特色は旅館やホテルに宿泊するのではなく、糸魚川の農村のご家庭にホームステイをすることです。短期間でもホームステイをさせていただくことによって親しみの感情が生まれます。ありがたいことに、糸魚川の方々にとって、聖学院は特別な存在であり、聖学院の生徒にとっても糸魚川は特別な場所となっていきます。そのため、糸魚川の農村の課題は決して他人事ではなく、生徒たちは自分たちの親しい人たちの問題として捉えることができます。

傷があったり、色が悪かったり、大きさや形が標準的でない野菜などの作物は、規格外品として扱われて、市場に流通しません。家庭で消費するか、仲間内に配るなどして消費をしています。農村の高齢化、過疎化は深刻な問題です。過疎化で村に人がいなくなると地元で作物を消費する人がいなくなります。農業は重労働であるに関わらず、収入が伴わないために担い手が育ちません。そのため生産量も減り、ちょうど良いのではと考えるかもしれませんが、視野を広げると課題の本質が見えてきます。2019年時点での日本の食料自給率は38%で、60%以上を海外からの輸入に依存しています。この先さらに食料自給率は低下していくでしょう。食を支える重要な農業を、非効率だからと言って、他国に押し付けている現状になっていないでしょうか？

聖学院大学

産官学連携＋SDGs推進＋ダイバシティ推進プロジェクト

ボランティア活動を通じてSDGsに貢献

聖学院大学は昨年の台風で被害を受けたいわき市の災害復興ボランティア活動に参加しています。SDGsの「住み続けられるまちづくり」にもつながる取り組みです。この活動に参加し、大学でまちづくりについて学びたいという具体的な目標を見つける学生もいます。

実際に行動を起こすことで深まる、自分ゴト化

教育はSDGsに対し、認知拡大という17全てのゴールを後押しする大きな役割を担っています。聖学院大学では様々なSDGsの取り組みがありますが、その中核をなしているのが「産官学連携＋SDGs推進＋ダイバシティ推進プロジェクト」です。教育、研究、地域貢献など様々な場面でSDGsを展開し、さらにワークショップなどを交えながら学内外にSDGsを浸透させていくことを目指した学生・教職員協働の取り組みです。

昨年は学食で特定のメニューを食べると、国連WFPを通じて発展途上国の子どもたちへ給食を寄付できるという取り組みを実行しました。今年は環境問題に視野を広げ「新聞紙でゴミ箱を作ろう！」というワークショップを開催。ポリ袋ではなく紙の新聞をゴミ箱にすることで環境に配慮した生活をしようという企画です。発案から企画・広報・当日の運営（講師・司会等）まで、全て学生主体で実施されました。新聞を折るだけで簡単につくれるので、最初はてこずっていた参加者たちも要領を得ると手軽に作れるようになっていました。

プロジェクトのメンバーである若原幸範先生は知識だけではなくアクションを起こすことの大切さを次のように語っています。「授業の中でSDGsの各テーマを扱うので、学生は知識としてはわかっていると思います。しかし自分ゴトとして捉えるにはもう一つきっかけが必要です。それが学生たちが共に活動する場です。お互いに企画や意見を出し合う過程で、理論だけではなく身近なところでのSDGsを共有するようになります。そういうコミュニケーションと行動の中で意識化していくと思います。」

実際、学生たちから様々な提案が出てきて、その結果、教職員も活性化しているそうです。授業でSDGsに触れ、興味を持ち、友だちとのコミュニケーションを通して新しい意識が芽生え、活発に提案をする。それが教職員の活性化にもつながる。聖学院大学ではSDGs推進への理想的な循環が生まれ始めています。

（上）「産官学連携＋SDGs推進＋ダイバシティ推進プロジェクト」メンバーの若原幸範先生。「今学生たちが主体的に動き始めているので、これまでの様々な取り組みを、このプロジェクトの枠組みでバージョンアップさせていきたい」と語っています。
（下）昨年行った「食べることで子どもたちの笑顔を増やそう」の展示風景。国連WFPを通じて発展途上国の子どもたちへ給食を寄付する企画です。

「新聞紙でゴミ箱を作ろう！」の様子。対面とオンライン両方で開催されました。

大山 美来

活躍ファイル *No.18

聖学院大学人文学部　日本文化学科　3年

在校生の活躍

お腹にプラスチックが詰まった魚の写真を見て衝撃をうけました

大山美来さん、SDGsに興味があり、何事にも真っ直ぐに取り組む聖学院大学の学生です。大山さんがSDGsに興味をもったのは大学1年生の時、「民俗環境論」の授業がきっかけでした。その後個人的にインターネットで海洋汚染について調べ、お腹にプラスチックが詰まった魚の写真を見て衝撃を受けます。以来危機感を覚え、SDGsに貢献したいと思うようになったそうです。あわせて国際環境NGOのツイッターをフォロー、情報を発信している人がたくさんいることを知り、自分も発信していこうと志を強くします。

そんな大山さんが今年出会ったのが「聖学院SDGsコンテスト PHOTO & MOVIE※」です。SDGsのことを発信できるのに加え、写真が好きだったこともあり作品を応募。いくつか応募した中の一つは蜜蝋燭の作品でした。蝋燭の多くは石油由来のパラフィンを原料に使っていますが、蜜蝋燭は蜂蜜の巣を原料にし、環境にも人にも優しい蝋燭です。子どもの頃から蜜蝋燭が家庭にあった大山さんは、SDGsというテーマにぴったりな上に、その時の蝋の垂れ具合が絶妙だったのでモチーフとして選んだそうです。そのコンセプトと写真が評価され見事入賞を果たします。

今年大学3年生の大山さんに就職活動について聞くと「業種というよりSDGsにどれだけ取り組んでいるかで企業を調べています」と答えてくれました。就職活動にもSDGsへの一貫した姿勢がうかがえます。大山さんのような人がどんどん活躍する社会になれば、17のゴールは遠からず達成されるかもしれません。

※「聖学院SDGsコンテスト PHOTO & MOVIE」の詳細は右のページをご覧ください。
大山さんの作品も掲載されています。

第1回

聖学院SDGsコンテスト

PHOTO & MOVIE

「ワタシが見つけたエコロジー」

受賞作品発表

SDGsコンテスト概要

- ●応募期間　2020年9月14日～10月14日
- ●受賞種別　最優秀賞（1名）／優秀賞（2名）／佳作（3名）／特別賞
- ●応募対象　聖学院で学んでいる方々・教職員・保護者・卒業生・受験生・聖学院関係者
- ●審 査 員　石原康男（フォトグラファー）、武本花奈（フォトグラファー）、佐藤慎（広報センター長）、聖学院広報センター

学校法人聖学院が主催する聖学院SDGsコンテストPHOTO & MOVIE。
写真を通して一人ひとりが身近な社会課題に目を向てほしいという主旨で開催されました。
初回となる今回、写真・動画合わせて62作品の応募をいただきました。その中から入賞8作品をご紹介いたします。
（webにて各作品の作品概要・審査員講評なども公開しています。右のQRコードからご確認いただけます。）

最優秀

［最優秀賞］ 仲井　勝巳　さん

みんなで糸電話、聞こえるかな？

ここはカンボジアの農村部にある小学校。私は10年ほど前（小学校教員時代）に、そこで小学校建設に携わりました。2020年1月にも訪れて、糸電話を紹介しました。子ども達は、糸電話で音が聞こえる不思議、面白さに気付いたようです。農村部では、まだ学校に必要な教材が不足しています。身近なものを教材として活用することで、子ども達の学びに繋がってくれたらと思います。

優秀

［優秀賞］ 高橋　輝雄　さん

くるくる廻る：町工場のSDGs

昭和な雰囲気の町工場に潜入。製品の生産から出た様々な金属ゴミを分別して捨てているのを見つけた。そして、職人さんの話がサステイナブルだったことに衝撃を受けた。

優秀

［優秀賞］ 中村　夏子　さん

八ッ場ダム 大切な水資源

八ッ場ダムの展望台から見下ろした景色です。最後のダム建設として賛否両論ありましたが、昨年の台風19号で荒川・隅田川の氾濫を最小限に食い止められたのは、完成したダムの貯水を開始した為だと言われています。私たちの大切な水資源の為に水没地となり移転をされた方々や携わった方々、そして群馬の豊かな自然に感謝いたします。

［佳作］
滝澤　佳代子　さん
高II理系クラスの裏紙

［佳作］
高橋　清子　さん
私にできること
～布と服に魅せられて
（三部作）

［佳作］
山本　周　さん
共生

［佳作］
大山　美来　さん
蜜蝋燭で短い夜を

［広報センター長賞］
富村　英朗　さん
5歳のSDGs

まだまだあります！

Seig NEWS

学生も生徒も教員も職員も
次のステップへと
日々新しい試みをしています。

さいたま上尾キャンパス

今年はLIVE配信！ 聖学院大学・聖学院みどり幼稚園・聖学院教会クリスマスツリー点火祭

11月25日（水）にクリスマスツリー点火祭を開催しました。点火祭は待降節（キリストの御降誕を待ち望む季節）の始まりを告げる大切な祭典です。例年は多くの方がキャンパスに集い盛大に催しますが、今年は新型コロナウイルス感染拡大防止のため無観客・ライブ配信にて開催しました。点灯後はドローンを使い、ツリーの綺麗な映像を配信でき、アクセス数は数日で1000件を超えました。現在は聖学院キリスト教センターFacebookにおいて録画映像を視聴いただけます。今年も聖学院大学らしい点火祭（礼拝）と共に、ツリーに灯がともる瞬間をぜひご覧ください。

学校法人聖学院

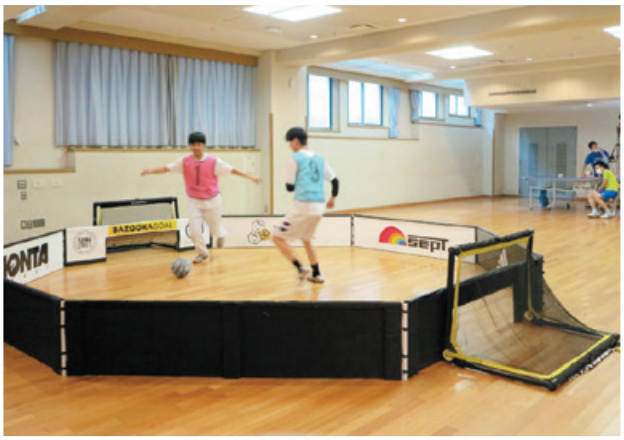
エコプロOnline2020出展

エコプロとは、環境総合展として、次世代技術や製品、サービス、CSR活動、環境保護活動、環境政策、産学官連携などの最新動向を紹介するプラットフォームです（主催：日本経済新聞社）。例年11月末に東京ビッグサイトにて企業や学校が展示を行なっていましたが、今年は11月25日（水）～28日（土）オンライン開催となりました。161社が参加する中、学校法人聖学院では環境学習パビリオン「エコスタディルームOnline」に出展し、これからの未来を生きる子どもたちに向けたSDGsにつながる教育コンテンツを配信しました。

聖学院中学校・高等学校

27の団体が参加、完全オンラインの「第114回創立記念祭」開催

11月2日（月）3日（火・祝）オンラインでの記念祭が開催されました。学年や部、委員会、プロジェクトなど27の団体が参加し、軽妙なトークで進められる料理教室や、ギターの弾き語りなど先生たちの特技を見つけられるプログラムや、タイの研修旅行の紹介、訪問したかった想いが伝わってくる糸魚川スケッチブックリレー動画など、いずれも工夫を凝らした楽しい企画となっていました。2日目はライブ配信もありました。午前中はパナ・ストリートサッカーの大会が開催され、競技の様子が生放送されました。午後は高1生徒発の学年行事「Only One for Others Award」も開催され、聖学院中高の生徒や先生の他、他校の生徒も参加して盛り上がりを見せていました。



※学校法人聖学院はグローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目指した活動を行っています。
※SDGs…2030年までの実現をめざし掲げられた、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」

女子聖学院中学校・高等学校

生徒会主催の美術展 JSG-ARTNEXT2020

今年、合唱コンクールが例年通り開催できなかったことが動機となり、生徒会主催による美術展『JSG-ARTNEXT2020』が実施されました。「強い心〜One for All, All for One（ひとりはみんなのために、みんなはひとりのために）〜」をテーマとし、今、困難な状況にある方々に届けたいと思う歌を選び、その曲の歌詞やメロディなどの世界観をもとにクラス全員でひとつのアートワークで表現し、メッセージを届けました。中I〜高IIの5学年が参加し、20の作品が完成しました。作品は記念祭で展示されました。公共の施設での展示も計画されています。

中3-3「走りだせ」
楽曲名：Happiness（嵐）

高II-4「We can fly!!」
楽曲名：宿命（Official髭男dism）

女子聖学院中学校・高等学校

75回生のミニ運動会「黄組の士気を高める会」を開催

11月13日（金）、高I運動会幹部の主催で「黄組の士気を高める会」が体育館にて開催されました。本来なら今年から自分たちが中学生を率いる立場になるはずでしたが、コロナ禍の影響で運動会は中止せざるを得ませんでした。しかし、熱い想いは止められず、来年に向けてさらなる団結を決意し、75回生だけのミニ運動会を実施しました。中2の競技種目「波のり」に平均台を飛び越えるコースを加えたオリジナルの競技で、4グループに分かれて競いました。

聖学院小学校

創立60周年記念礼拝をお捧げしました

11月2日（月）気持ちのよい秋の朝、聖学院小学校は創立60周年記念礼拝を捧げました。聖学院小学校が「女子聖学院小学部」としてスタートしてから今年で60年、小さな学校はこんなに立派な小学校に成長しました。神さまに守られ、多くのご家庭、子どもたち、先生や職員達に支えられ、引き継がれて今日の日を迎えられることを心から感謝するひとときとなりました。礼拝の後にはPTAから新しい「校旗」が寄贈されました。新しい校旗はこれから10年、20年と引き継がれ、きっと100周年のときにも飾られることでしょう。PTAのみなさま、すてきな校旗をありがとうございました。60周年を記念して、今回特別にデザインされたパッケージのチョコレートとクリアファイルが全員に配られました。創立60周年の時に立ち会えたことをいつまでも誇りに思える、そんな創立60周年記念礼拝でした。

聖学院小学校

新しい音楽会

11月20日（金）聖学院小学校の音楽会が行われました。今年はすべての行事が特別であるように、音楽会もかなり特別でした。聖学院中高の講堂を借り、歌やリコーダー、器楽合奏を家族に聴いていただいていたこれまでの音楽会から、今年は小学校のチャペルで、子どもたちだけという音楽会です。1年生代表による「はじめのことば」からスタート。1年生と2年生の器楽合奏、続いて3年生と4年生に入れ替わり、最後は5年生6年生と入れ替わって、練習してきた成果を次々と披露しました。3年生はボディパーカッションだったり、5年生は手づくり楽器が登場したり、今年は例年以上に、バラエティに富んだ合奏も次々と発表されました。最後に6年生の「おわりのことば」そして校長先生のことばで幕を閉じました。かつて経験したことがない新しい音楽会を子どもたちは新鮮な思いで楽しむことができました。

※学校法人聖学院はグローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目指した活動を行っています。
※SDGs…2030年までの実現をめざし掲げられた、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」

まだまだあります！

Seig NEWS

聖学院幼稚園

お店屋さんごっこ開店

11月13日（金）、年長組の「お店屋さんごっこ」が開店しました。何日もかけて作った品物や、お家の方と作った品物が並んだホールはまるで夢の国！3日前にはしっかり下見もして「欲しいもの」を決めていた年少・年中組の子どもたちも朝から大興奮。年長組の上手な接客と、お買い上げくださったお客様のお陰で完売御礼！お買い物を楽しんだのはもちろんのこと、お店屋さん側も「喜ばれる経験」をした素敵な一日となりました。

聖学院幼稚園

感謝祭礼拝

11月19日（木）、豊かな実りを喜び、神様に感謝する「感謝祭礼拝」を守りました。野菜や果物を前に並べ、いつもとは違う雰囲気の中、チャプレンの先生のお話を聞きました。育ててくださる神様や、私たちが美味しくいただくために力を尽くしてくださるいろいろな方に感謝することを覚えました。翌日は野菜たっぷりの特別な給食メニューで楽しみました！

聖学院みどり幼稚園

年長お泊り会

10月30日（金）から翌31日（土）にかけて年長さんたちによるお泊り会をみどり幼稚園内で行いました。寒い日でしたが一人の欠席者もなく、子どもたちの熱気に包まれたとても楽しいお泊り会となりました。室内オリンピックやオリエンテーリング、そして花火など子どもたちは目を輝かせて楽しんでいました。夕食はみんなで作ったカレー。とても美味しく、多くの子どもたちがおかわりをしました。最後はみんなでプレイルームに布団を敷き詰めて寝ました。多くの子どもたちにとっては、初めて親元を離れて過ごす一日。初めての体験ばかりです。みんなと力を合わせてやり遂げたお泊り会。自信をつけて帰宅してゆく子どもたちの姿は、ひと回り大きく成長したように感じました。年長さんたちのこれからの成長がますます楽しみです。

聖学院みどり幼稚園

プレイデー実施

11月7日（土）、雨天による2回の延期を経てようやく訪れた晴天のもと、待ちに待ったプレイデーが実施されました。今年はコロナウイルス感染拡大予防のため、在園児と保護者の方々のみの参加でしたが、親子で楽しんだ素敵な一日となりました。みどり幼稚園はプレイデーを保育の延長として位置づけています。子どもたちは日頃の遊びの成果を存分に発揮し、楽しみながらプログラムに取り組みました。子どもたちが楽しみながらも一生懸命に取り組む姿を、保護者の方々は精一杯応援しながら、温かく見守ってくださっていました。子どもたち一人ひとりの心に残る一日となったのではないでしょうか。

※学校法人聖学院はグローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目指した活動を行っています。
※SDGs…2030年までの実現をめざし掲げられた、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」

Our Mission

女子聖学院中学校・高等学校　事務室
（駒込キャンパス）

総務・経理的なことから授業支援、就学支援、広報活動まで女子聖学院中学校・高等学校事務室は学校運営に必要な様々な業務を行なっています。具体的には建物、設備のメンテナンスや証明書の発行、また授業支援としてパソコンの授業サポートに行ったり、理科の実験準備、図書館学習のサポートなどをしたりします。就学支援においては就学支援金や奨学金の手続きを行います。学校を支援してくださっているPTAや翠耀会（同窓会）、後援会の窓口となり、先生方と各協力団体との円滑な関係を維持するのも大切な仕事の一つです。広報業務として学校案内を作ったりホームページを運営したり、学校説明会の準備なども行なっています。

今年は新型コロナウィルスの関係でオンラインで学校説明会などを行っています。あらゆる場面で情報インフラに詳しい先生がこれらの環境を整えてくださいます。授業は教員、事務は職員ということではなく、教員と職員が協力し合いながら学校運営を進めています。時には意見を出し合い、お互いに受入れ合う教員と職員の良い関係があると思います。こういった教職協働を維持する上でも、職員は今後、広い視野で色々な業務に携わっていくことが求められると思います。自分に与えられている業務が教育にどういう役割を果たしているのか意識しながら働くことが大切だと思います。

学校事務の行き着くところは教育環境の整備だと思います。どの業務も最終的には子どもたちの学習環境につながっています。「学校事務」という分野のプロ意識をもち、間接的な教育の担い手として、これからも研鑽していきたいと思います。

（取材日／2020年10月）

Our Mission

1.
子どもたちが安心して勉強に取り組める学習環境の整備

2.
学校運営に協力いただいているPTAや同窓会、後援会との連携サポート

3.
学校事務のプロフェッショナルとして研鑽を積むこと

●STAFF
岡部剛・標真明・飯田芳里・山田麻美・萩原加代・矢部幸子・沼田祐子・松原朋美・木村奈緒美・倉橋基

●オフィス
女子聖学院中学校・高等学校　1F

EPISODE #11

聖学院歴史探訪

#11 聖学院教育の歴史 -建学の精神・上-

「当時の日誌」（出典:https://www.seig.ac.jp/history/chronology/）

以上述べたこと［建学の精神］を、私たちの教師が教えた言葉でたどってみることにしましょう。典拠とした文献は、全て学校法人聖学院創立八〇周年・ディサイプルス宣教百年を記念して出版された『先人の求むるところ』（一九八三年刊）です。この本は、聖学院各学校の図書館に常備されていますから、学院のすべての学生・生徒はぜひ読んでほしいと思います。

この本の冒頭に、前理事長・院長小田信人が「聖学院精神」と題して、学院建学の精神を石川角次郎と平井庸吉の考えを祖述しながら紹介しています。石川角次郎は、H・H・ガイ博士と共に（男子）聖学院を創設し、神学校教授に兼ねて初代中学校長となった人ですが、「聖学院」の校名の命名について次のように書き残しています。

「我等は君が学園を『聖学院』と名付けた。その意義は、聖なる学院ではなく、聖学の院である。聖学とは聖人の学である。聖人の学とは、聖人の教を学ぶばかりでなく、学んで聖人となるのである。されば本校の理想は聖人を養成することである。」

（次号に続く）

出典:聖学院キリスト教センター編『聖学院の精神と歴史』聖学院ゼネラル・サービス,2006年版（出典より一部変更）

学校法人 聖学院
理事長／清水　正之　院長／山口　博
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2　Tel 03-3917-8351
ホームページ https://www.seig.ac.jp/　E-mail pr_h@seigakuin-univ.ac.jp

■さいたま上尾キャンパス

聖学院大学
・政治経済学部／政治経済学科
・人文学部／欧米文化学科　日本文化学科　児童学科
・心理福祉学部／心理福祉学科
学長／清水　正之　創立／1988年　〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号　Tel 048-781-0925

聖学院大学大学院
政治政策学研究科／文化総合学研究科／心理福祉学研究科
創立／1996年　〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号　Tel 048-780-1801

聖学院みどり幼稚園
園長／山川　秀人　創立／1978年
〒331-0045 埼玉県さいたま市西区内野本郷820　Tel 048-622-3864

■駒込キャンパス

聖学院 中学校 高等学校　校長／角田　秀明　創立／1906年
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1　Tel 03-3917-1121

女子聖学院 中学校 高等学校　校長／山口　博　創立／1905年
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2　Tel 03-3917-2277

聖学院小学校　校長／佐藤　慎　創立／1960年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1　Tel 03-3917-1555

聖学院幼稚園　園長／佐藤　慎　創立／1912年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2　Tel 03-3917-2725

●インターネットでの寄付のお申し込みについて
クレジットカード（VISA、MasterCard）をお持ちの方は、お申し込みから入金までご自宅等で、PC、スマートフォン、携帯電話からインターネットによるお手続きができます。下記URL、QRコードにアクセス下さい。
https://www.seig.ac.jp/asf/

住所変更・広報誌の発送停止・お問い合わせ
https://www.seig.ac.jp/asf/contact/
学校法人聖学院ASF事務局
Tel 03-3917-8530（月～金 9:00～17:30）